



台風がやってくる

村中 李衣

プロフィール

84年、『かむさはむにだ』で当協会新人賞受賞。日本標準社から新しい試みの絵本5冊近刊予定。大学では、実験連作小説を執筆中。

七月最後の日曜日、朝の博多駅。いつになく、ひとかけは、まばらだ。もうじき、鹿児島の方から台風が北上してくるらしい。夜には、ここ博多を含む九州全域が暴風域に入る予定だと、駅の電光掲示板が、くり返し伝えている。

ホームの床は、断続的に降り続く雨でぬれ、しめったにおいがある。いつもはホームのはしっこにたむろしている鳩たちも、今日ばかりは、姿を見せない。時折、客がポイ捨てしたプラスチックケースや、菓子パンの袋が、風におおられ、ホームを疾走していく。

二番ホームにかもめ七号が停車している。

かもめ七号、三号車自由席。日曜日となれば、鉄道マニアの人たちや観光客で満員の車内だが、今日はボックス席に、たった一組の客が乗り込んでいるだけだ。

〈午前八時四十分〉

ひっそりしていた車内に、グォーンと冷房の入るくぐもった音がし始め、車内アナウンスが入った。

「毎度JR九州をご利用頂き、ありがとうございます」

とたんに、ボックス席から、天井に向かって突き抜けるような明るい声が響いた。

「はーい、どういたしましてー」

「あーい、どうちましてー」

車内アナウンスは続く。

「この列車は、午前九時発特急かもめ七号、長崎行きです」

「そうでーす」

「でーす」

絶妙なタイミングで車内アナウンスに応じる少年の声。

そのすぐあとに続く小鳥のような女の子の声。

「のちほど車内を乗務員が回りますので、御用のお客様は、なんなりとご遠慮なくお申し付けください」

「はーい、わかりましたー」

「あーい、わかちたー」

〈午前八時四十五分〉

「あれっ、とうさん、どこ行くの？ トイレ？ それとも、あっ、そうか、ビールだよね。旅にはいつもとうさん、ビ